

物語におけるキャラクターとパーソナリティ

大阪芸術大学 教養課程 教授 純丘曜彰

構造主義言語学の問題

原インドヨーロッパ語、そしてアーリア人の実在性の問題から、言語学、とくにライプツィヒ大学の若手文法学派では歴史的な音韻変化を研究してきた。これに対して、ソシュール(1879-1943)は、発話(パロール)の背景にある言葉(ラング)の枠組、共時的な差異のマトリクスに着目した。信号機で言えば、赤黄青の3色で、赤の枠内でのブレは問題にならない。そして、赤(記号、シニフィアン)と「止まれ」(意味、シニフェ)の関係も恣意的であり、必要に応じて細分化される、とした。しかし、彼はこのアイデアを著書としては出版せず、彼の死後、彼の講義の受講者のノートを編纂して、1916年に出版されたものが、『一般言語学講義』である。それが、大戦後、「構造主義」として一世を風靡した。

しかし、これには、弟子たちの理解能力の限界が大きく影響してしまっている、と、出版直後から疑われていた。そもそも彼らは、ソシュールの背景にある当時の記号論を理解していなかった。彼に先行して、プラグマティストのパーズ(1859-1942)が、言語の科学的厳密化のために、数学の引数・関数・値という図式から、対象・記号・意味という記号論の関係を確立しており、ソシュールは、ここからあえて対象を省いて、人と人とのコミュニケーションとして、プラズマティズムを徹底し、後の言語行為論を先取りした。くわえてまた、彼は、記号・意味の恣意性や細分化が、言葉としての文化的・個人的な枠組のブレを生じさせ、通訳不能に陥ることも、パラダイム論の先取りとして自覚していた。だから、ソシュールはこれを出版しなかったのだろう。

これらの問題に対し、ロシアの言語形成学派(フォルマリズム)のシクロフスキー(1893-1984)は、詩的言葉の異化(オストラネーニエ)作用に着目し、定型(クリシエ)を打破して、あえて対象を着目し直させる効果がある、と論じた。また、バフチン(1895-1975)は、小説の複数のキャラクターが異なる言葉に依拠していることによって、その対話が多声(ポリフォニー)として真相を立体的に描き出すことに気づいた。しかし、ロシア革命後の言論統制的スターリニズムは、異化や多声を許さず、彼らは解散に追いやられた。とはいえ、このソシュール理論の展開は、その後、亡命者のヤコブソン(1896-1982)を通じてプラハのマテジウス(1882-1945)に伝えられ、そこに機能主義学派を生み出した。それは、もはや言葉に差異のマトリクスを前提とせず、差異もまた、必要に応じて新たに生み出されるものとなり、後期ウィットゲンシュタイン

(1889-1951)やオースティン(1911-60)を日常言語学の研究へ展開させた。

言語行為としての物語

すでにシクロフスキーは、物語が、歴史順序のままの記述ではなく、観客を惹きつけるためのプロットとして、独自の叙述順序を持つことを指摘している。つまり、物語は、記録ではなく、対人的な言語行為である。ここにおいて、話者と観客とは、もとより異なる思考のマトリクスに依拠している。そして、ものめずらしい物語は、詩的であり、観客の依拠していたマトリクスを現象学的に揺るがす。そこでは、あつて当たり前のものが無くなり、過剰になり、また、疑わしくなる。たとえば、正義が失われ、正義と正義が対立し、正義と信じていたものが悪を帯びる。

くわえて、バフチンが言うように、物語においては、この動揺状況を、状況と、複数のキャラクターによって多声的に構成する。まず、状況とプロタゴニスト(主人公)とに葛藤があり、また、プロタゴニストとアンタゴニスト(対立役)との人間的な対立があり、さらに、プロタゴニストの内面においても、共存しえない異なる思考のマトリクスに矛盾を生じる。この三重の葛藤が物語のシンフォニーを成す。これらのほかにも、バディ(相棒)やウィズ(両義的魔法使い)、そして、彼氏彼女などのキャラクターが配置され、そこに複雑な緊張関係をもたらす。

重要なのは、これらのキャラクターがそれぞれに異なる思考のマトリクスに依拠している、ということだ。つまり、対象としては同じ物事でも、その受け取り方は千差万別。この思考のマトリクスの違いは、それぞれのキャラクターごとの異なるライフスタイルとしても実体化している。それゆえ、一般的には世界が異なるキャラクターが物語の中では、たがいに直面對峙して、その齟齬の摩擦こそが物語を定型(クリシエ)ルーティンではない新たな方向へ展開する。つまり、詩的な異化は、対為(行為の対話)によって、すべてのキャラクターにとって外在的に生じ、彼らのパーソナリティにアーク(学習成長)をもたらす。

しかし、これらのキャラクターのパーソナリティは、話者において、人為的に設定され、コンステレーション(星座)として巧妙に配置されるべきものである。つまり、プロットは、物語の叙述順序のみの問題ではなく、観客自身の思考のマトリクスを揺るがすために最適に構成すべきものである。